

熊本地震からの復旧・復興に向けた県民の生活に深く関わる「重点10項目」など県政の主な動き、将来に向けて夢や希望を与える出来事、県民幸福量の最大化に資する出来事、県政課題の解決に向けて取組みを積極的に進めたものを選びました。

◎「平成」から「令和」へ ～改元、外国人材、消費税 新たな時代の幕開け～

5月1日に「平成」から「令和」へと改元され、新たな時代が幕開けした。

上皇さまは、御在位中、三度本県にお越しになり、熊本地震の際には温かい励ましのお言葉を頂戴するなど、県民に深い愛情を注いでいただいた。上皇さまへの感謝の気持ちと御在位30年をお祝いするため、2月には県庁で記帳所の設置や記念植樹を行った。

また、10月には天皇即位を広く披露するため、「即位の礼」が執り行われ、本県からもお祝いの品として、肥後象がんの香合を献上した。

このほか、4月に外国人材の受け入れ拡大に伴う新制度がスタートし、10月には消費税率が5年半ぶりに10%に引き上げられるなど、県民生活においても節目の年となった。

◎4万人以上の方々がすまいの再建を実現 ～すまい・しごとの再建に全力～

【すまいの再建】これまでの県独自の5つの支援策に、災害公営住宅への入居費用の助成を加えた“6つの支援策”や、地域支え合いセンターや生活再建支援専門員等による相談・支援等により、仮設住宅等の入居者については、ピーク時の約4.8万人から、今年11月末現在で8割を超える約4.2万人がすまいの再建を実現した。

残る6千人の方々、特に様々な課題により再建の目途が立っていない18世帯の方々が一日も早く再建できるよう、重点的かつ継続的に支援していく。

また、災害公営住宅の整備も各市町村で着々と進み、来年3月末までには全ての住宅が完成予定。

【しごとの再建】農業分野では営農再開率が11月末時点で99.8%に達した。一部の被災農地等の復旧工事を県が受託するなど、今年度中の100%再開に向け全力で取り組んでいる。地震の影響が残る中でも、「世界と戦える農林水産業の実現」に向けて尽力した結果、平成30年度（2018年度）県産農林水産物の輸出額が過去最高の60億円となり、目標を1年前倒しで達成した。

商工業分野でも、中小企業の再建を支援する「グループ補助金」が99.7%の交付決定を終え、そのうち約97%の企業が復旧工事を完了、被災企業の復旧が着実に進んでいる。今年度からは新たに、特任経営指導員を配置しての集中的な支援や、熊本型の持続化補助金の創設など、事業者の復興に向けて様々な取組みで支援している。また、半導体や自動車関連産業のみならず、IT関連の企業誘致も積極的に展開したことにより、熊本地震後の誘致件数が130件を超えた。

◎俵山トンネルルート、全線開通！ ～阿蘇へのアクセスルート 完全回復へ見通し明らかに～

2月に国道57号北側復旧ルートの二重峠トンネルを含む全線が貫通。9月には、俵山トンネルルートで最後の不通区間だった大切畑大橋の工事が完了し、地震から3年5か月ぶりに全線開通した。また、国道57号現道部分（南阿蘇村立野）も開通見通しが示され、北側復旧ルート、国道325号阿蘇大橋ルートとともに、全ての幹線道路が来年度中に開通する見通しとなった。

JR豊肥本線は、来年度中に復旧工事が完了し運転再開見通しとなった。また、南阿蘇鉄道についても、2022年度中に復旧工事が完了し、2023年夏の運転再開の見通しが示された。通勤・通学のみならず、観光面など、世界文化遺産登録に向けて国推薦候補入りを目指す阿蘇地域が復興へ前進した一年であった。

◎県道4車線化、土地区画整理事業 工事に着手 ～益城町の復興まちづくり 目に見える形に～

住民の意向をより丁寧に把握しながら事業の加速化を図るため、4月に「県益城復興事務所」を益城町内へ移転。県道熊本高森線の4車線化は、1月にモデル地区の工事に着手し、順次区間を拡大するなど、順調に整備が進んでいる。10月には、地域の方々に事業への理解をより深めていただくため、バス停や歩道の原寸大模型（モックアップ）の体験会を開催した。

一方、木山地区の土地区画整理事業は、6月と9月に順次仮換地指定を行い、11月には先行する5街区の工事に着手。早いところでは、来年6月から自宅再建が可能となる見通し。

今後、工事が目に見える形で進んでいくことで、住民の方に新しい街の姿を実感していただき、自宅再建や新たなまちづくりへの希望が膨らんでいくことを期待している。

◎クルーズ拠点の愛称は「くまモンポート八代」！～陸・海・空の玄関口 新たに生まれ変わる～

【熊本駅周辺/桜町バスターミナル】世界的建築家・安藤忠雄氏が手掛けた新たなJR熊本駅舎が3月に完成。「熊本城の武者返し」をイメージできる姿は、熊本の陸の玄関口にふさわしい勇壮感を現している。

また、9月には、桜町地区再開発事業により、熊本のバスの結節点となる「桜町バスターミナル」を含む、商業施設やホテル、公益施設等で構成された複合施設「サクラマチクマモト」が開業。今後のバスの利便性向上や、熊本市中心市街地の更なる発展や賑わいづくりに期待。

【八代港】6月に、ロイヤルカリビアン社、国、県の三者により、八代港クルーズ拠点の魅力発信を目的とした完成イメージ映像を公表。8月には、このクルーズ拠点の愛称が「くまモンポート八代」に決定し、「くまモン」の名前が入ったことで、国内外からの認知度が飛躍的に高まることを期待。来年4月の供用開始に向け、完成が近づいている。

【阿蘇くまもと空港】コンセッション方式の導入に向け、地元企業も参画する「熊本国際空港株式会社」が設立され、7月に同社による空港ビルの事業運営が開始。12月には、県から同社への出資や、パートナーシップ協定の締結について公表した。来年4月の国内線別棟ビル供用開始に向け工事も順調に進んでいる。

長年の課題であった空港アクセスは、鉄道整備に関する基本的方向性（ルート、事業スキーム、事業費等）についてJR九州の同意を得て、改善の道筋をつけた。アクセス鉄道の開業を2023年春の新ターミナルビル供用開始に可能な限り近づけるよう、国や関係機関と連携し、全力で整備に向けた取組みを進めていく。

昨年度に利用者数が初めて年間20万人を突破した国際線は、日韓関係の悪化に伴い、8月以降ソウル線、大邱線が順次運休した。一方で、10月には国がラオス線の就航を許可するなど、今後の国際路線の多角化に向け、熊本国際空港株式会社と連携して取り組んでいく。

◎選手も観客も県民も「ONE TEAM」で燃えた！～2つの国際スポーツ大会 熊本が熱狂！～

【ラグビーワールドカップ】9月20日に開幕したラグビーワールドカップ2019日本大会は、日本代表の史上初のベスト8進出という大活躍と、心こもったおもてなしで全世界から称賛を浴びた。本県で開催された2試合（10/6（日）フランス対トンガ、10/13（日）ウェールズ対ウルグアイ）も、観客動員数が合わせて5万5千人を超え、熊本市中心市街地のファンゾーンでも、日本代表戦は入場規制となるほどの大変な賑わいを見せた。また、本県でのラグビー開催を前に、伝統ある九州・山口の祭りが熊本市中心部に一同に集結する「祭りアイランド九州」が九州で初めて熊本市で開催され、2日間で22万人もの観客が来場した。

【女子ハンドボール世界選手権大会】世界24カ国が参加した女子ハンドボール世界選手権大会は、11月30日から12月15日の16日間にわたり、県内5会場で全96試合が開催された。大会名誉総裁である高円宮妃殿下及び寛仁親王妃信子殿下にも御臨席いただき、世界トップレベルの試合に、国内外からの観戦客はもとより、県内学校や地区による「一校（区）一国運動」や企業応援などオール熊本で大会を盛り上げた。また、日本代表チーム「おりひめJAPAN」の活躍もあり、観戦者数は31万人を超え、会場は大きな声援に包まれた。

地震後、大会開催を心配する声もあったが、2つの国際スポーツ大会の開催を通して、これまでの支援に対する感謝と、熊本の復興する姿を世界中に発信することができ、大成功を収めることができた。

このほか、7月から8月にかけて、全国高等学校総合体育大会が南部九州4県（鹿児島県・熊本県・宮崎県・沖縄県）で開催。本県では、高円宮承子女王殿下に御臨席いただいたアーチェリーなど7競技が開催され、県内外から延べ11万人を超える観客が来場。今年の熊本はまさにスポーツイヤーであった。

◎復興のシンボル 雄姿ふたたび ～熊本城 特別公開始まる～

熊本地震で大きく傷ついた熊本城は、ラグビーワールドカップや女子ハンドボール世界選手権大会の開催に合わせ、大天守の外観復旧が完了し、10月から特別公開が開始された。11月には、地震以降3年7か月ぶりに大小天守4体のしゃちほこが揃い、かつての雄姿を現してくれた。来年春には復興の過程が間近で観覧できる特別見学通路の開設も予定されており、熊本を代表するシンボルとしての復興が進んでいる。

◎もっと、もーっと！くまもっと。～観光プロモーション 続々と展開～

7月から9月にかけて、本県と全国のJRグループ6社による、日本最大級の大型観光キャンペーン「熊本 DESTINATION キャンペーン もっと、もーっと！くまもっと。」を実施。全国規模のプロモーション活動はもとより、県民も知らない新たな観光素材の発掘や、地域活性にもつながる旅行商品の造成など、熊本地震からの観光復興、熊本観光の再生を目指した。また、JR九州との共同企画「熊本フォーリンラブ」では、くまモンとヒロインがトレンドドラマ仕立てで熊本の魅力を伝えるPR動画が再生回数100万回を超えるなど、好評を博した。

このほか、大河ドラマ「いだてん」の放映を機に、金栗四三氏ゆかりの地をPRするなど、積極的な観光プロモーションを展開。玉名市の大河ドラマ館、和水町の金栗四三生家や金栗ミュージアムには、大勢の観光客が訪れた。地元では新たなフルマラソン大会の創設など、金栗氏の偉業や功績を末永く後世に伝える取り組みも数多く実施された。

また、昨年、県と玉名地域の1市2町、筑波大学（金栗氏の母校）との間で締結した『スポーツを通じた地域経済の活性化に関する連携協定』に基づき、筑波大学男子駅伝チームによる熊本合宿が実現。その後チームは箱根駅伝の予選会を見事突破し、26年ぶりの本戦出場を決めた。

◎くまモン、キャラクターで初めて…!? ～ソフトパワーが熊本を元気に！～

【くまモン】平成30年（2018年）の関連商品売上高が過去最高の1,505億円を記録するなど、海外でも大活躍を続けるくまモン。3月には中華圏における名称を「熊本熊」に変更し、世界最大の市場での更なる展開を図ったほか、6月には東南アジアにも本格進出するなど、目まぐるしい活躍をみせた。また、フランス・ノートルダム大聖堂の大規模火災を受け、「フランス観光親善大使」として、熊本地震の際のフランスからの支援への恩返しのために奔走した。

国内でも、キャラクターとしては初めて「プロフェッショナル 仕事の流儀」に出演したほか、くまモンデザインの年賀状やホンダ「クロスカブくまモンバージョン」の販売など、話題に事欠かない一年だった。

来年3月には、デビュー10周年を迎える。“アニバーサリーイヤー”を皆さんでお祝いするため、記念ロゴとイラストも発表。くまモンの今後の活躍を大いに期待している。

【『ONE PIECE』熊本復興プロジェクト】昨年完成したルフィ像に続き、“麦わらの一味「ヒノ国」復興編”と題して、麦わらの一味の8体が県内各地に設置されることとなり、4月に設置場所及びキャラクターを公表。その第一弾として、12月に益城町にサンジ像、阿蘇市にウソップ像が完成した。今年度中に2体、来年度中に4体が順次完成し、麦わらの一味が熊本の復興を力強く後押ししてくれると信じている。

◎ハンセン病 元患者家族に対する補償手続開始 ～重要施策を巡る動き～

【ハンセン病問題】国のハンセン病隔離政策で患者と同様に差別や偏見の被害を受けたとして、元患者の家族が国に謝罪と損害賠償を求めた訴訟について、6月の熊本地裁判決は国に賠償を命じる判決を言い渡し、国は控訴を断念、7月に判決が確定した。これを受けて、8月に蒲島知事が菊池恵楓園を訪問し、入所者らと懇談。改めて偏見・差別の根絶に向けて尽力する決意を表明。11月には、ハンセン病元患者家族に対する補償法等が成立、施行され、補償金の請求受付がスタート。今後、県としても、御家族が補償金請求をためらうことがないように、関係機関と連携し、偏見・差別の根絶に向けた啓発により一層力を注ぐとともに、対象となる皆様に寄り添った取り組みを進めていく。

【水俣病問題】公式確認から63年が経過。10月に開催された水俣病犠牲者慰霊式には、新たに就任したばかりの小泉進次郎環境大臣も出席し、改めて水俣病問題への注目が集まった。県では、蒲島県政3期目の目標である1,200件の認定審査完了に向け、丁寧に取り組むとともに、高齢化する胎児性・小児性患者やその御家族の方々への支援などにも取り組んだ。また、9月には、ポーランドで開催された水銀に関する国際会議で、水俣病資料館語り部の御協力をいただき、「公害の原点」水俣病の経験や教訓を世界に向けて発信した。今後も水俣病問題に真摯に向き合い、その解決と地域の再生に向け全力を尽くしていく。

【川辺川ダム問題】球磨川の治水については、6月の「球磨川治水対策協議会」において、国土交通省と県が、新設ダムを除く客観的に見て最も有利と思われる治水対策の組合せ10案を提示。11月に行われた九州地方整備局長・知事・市町村長会議で意見が交わされた。今後は、国・流域市町村の知恵を結集し、早期に共通認識が得られるよう全力を尽くす。また、協議会における10案の検討と並行して、現段階で実施可能なハード対策を着実に実施するとともに、ソフト対策の充実・強化を進めていく。さらに、五木村の振興については、4月に村と共同で策定した新たな「ふるさと五木村づくり計画」に基づき、村民の皆様が将来にわたって展望と希望が持てるよう、村との協力のもとしっかりと取り組んでいく。